

経 済 民 生 常 任 委 員 会 記 録

平成 30 年 7 月 23 日(月)午後 1 時 00 分～午後 2 時 59 分(9 階 909 会議室)

○出席委員(9名)

委 員 長	石原洋三郎	副委員長	誉田 憲孝
委 員	佐々木 優	委 員	後藤 善次
委 員	斎藤 正臣	委 員	黒沢 仁
委 員	佐久間行夫	委 員	山岸 清
委 員	渡辺 敏彦		

○欠席委員(なし)

○市長等部局出席者(商工観光部)

商工観光部長	横澤 靖	商工観光部次長	杉内 剛
観光コンベンション推進室長	清野 良彦	観光コンベンション推進室次長	柳澤 正俊
観光コンベンション推進室観光プロモーション係長	清野 明	観光コンベンション推進室観光プロモーション係主査	柏倉 泰之

○議 題

「地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域の活性化に関する調査」

1. 当局説明(商工観光部)
 - (1) 県内及び本市の地域密着型プロスポーツチームの現状について
 - (2) 本市スポーツホームタウン推進に向けた取り組み状況と課題について
2. 意見開陳
3. その他

午後 1 時 00 分 開 議

(石原洋三郎委員長) ただいまから経済民生常任委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりです。

地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域の活性化に関する調査を議題といたします。

この件について商工観光部に説明をお願いしましたところ、業務多忙のところ、本日お引き受けくだることとなりました。委員会を代表して御礼申し上げます。

それでは、早速議題に入りますが、前回の委員会で皆様からご意見のあった事項は、あらかじめ当

局のほうにもお伝えさせていただきましたので、ご了承願います。

また、委員の皆さんからの質疑は、聴取内容を全てご説明いただいた後に行いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、当局からの説明を求めます。

(商工観光部長) 資料を準備いたしましたので、配付させていただいてよろしいでしょうか。

(石原洋三郎委員長) はい、よろしくお願いいたします。

【資料配付】

(商工観光部長) 今般の調査、地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域活性化に関する調査でございますが、4点ほど内容をまとめた資料でございます。第1点目が県内及び本市地域密着型プロスポーツチームの現状、2点目が本市に拠点を置くプロスポーツチームの実態、3点目が地域密着型プロスポーツチームがもたらす効果、4点目が本市スポーツホームタウン推進への取り組み状況と課題でございます。

内容につきましては、観光プロモーション係長より説明させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(観光コンベンション推進室観光プロモーション係長) それでは、資料に基づきまして、ご説明をさせていただきます。

2ページ目をごらんください。まずは、県内及び本市の地域密着型プロスポーツの現状ということで、どんなプロスポーツチームが所在をしているか、あるいは関与しているかということをもとめました。まずは、福島県全域ということでございますが、こちらにつきましてはプロ野球独立リーグの福島ホープス、メジャーリーグでも活躍しました岩村明憲監督を監督とするチームでございます。それから、もう一つ、プロバスケットボールの、今年度からBリーグという名前になりましたが、福島ファイヤーボンズというチームが2部東地区というところに加盟をしております。県全域としては、以上2チームでございます。

続いて、福島市でございますけれども、サッカーJ3リーグに加盟します福島ユナイテッドFC、こちらにつきましては福島市と会津若松市をホームタウンとする県内全域となっております。クラブ事務所は、飯坂に所在をしております。会津若松市につきましては、ホームスタジアムの一つとしてあいづ陸上競技場で試合を行っておりますので、昨年度よりホームタウンとなりました。それから、もう一点、エアレースの室屋義秀選手、こちらの選手は広い意味で書かせていただきましたが、ふくしまスカイパークを練習拠点として活動をされております。

続いて、下段に渡りまして、郡山市でございますけれども、1つはアイスホッケーの東北フリーブレイズというアジアリーグに加盟するチームがございます。こちらにつきましては、スポンサーがゼビオスポーツということで、郡山市と八戸市を本拠地に置いて活動されております。それから、バレーボールVリーグのデンソーというチームでございます。こちらにつきましては、昨年の11月に協定

を結びまして、会場確保などの協定を結んでいるところでございます。参考ですが、デンソーにつきましては、もともとは愛知県西尾市を本拠とするチームでございまして、県南のほうにデンソーの工場があるということで、今回この協定に結びついたということでございます。それから、参考として書かせてもらいましたが、郡山市内のほうでスペインのサッカーチーム、セビージャFCというチームが活動しております。こちら主に人材、選手の発掘というところをメインとしまして、昨年サッカースクールを開校して、休校している校舎、グラウンドを活用して練習をしているということでございます。今年度よりスポーツ少年団の小学生枠として郡山市のほうに登録があったというところを確認いたしました。

最後に、いわき市でございしますが、こちらのほうには東北社会人2部南リーグで活躍しておりますいわきFCが本拠を置いております。以上、プロスポーツの現状でございます。

続きまして、次のページに移りまして、ではこういったチームをサポートしながら、こういった取り組みを行っているかということで、まず福島県の取り組みとして上段でございます。地域密着型プロスポーツ応援事業ということで、平成30年度の取り組みをまとめたものでございます。福島県を本拠地に持つプロスポーツチームを復興のシンボルチームとして、県民が一体となって応援する文化を育み、復興へ歩む県民活力の向上や地域間交流による地域の活性化を図るということで、大きく事業を3つ展開しております。

まず、第1点目、サポーターズマッチの開催事業として1,500万円ほどでございますが、県がホームゲームのスポンサーとなりまして、選手とのふれ合いや応援、スポーツイベントなどを実施しております。また、会場のほうでは復興状況の発信なども行っているということでございます。

こちらにつきまして、右側の事業成果ということで書かせてもらいましたが、県のサポーターズマッチ開催事業につきましては、ユナイテッドFCについて2試合、ホープスについて2試合、ファイヤーボンズについて2節4試合、こちら観戦者の増加ですとか、ファン層の拡大に取り組んでいるということでございます。ファイヤーボンズの2節という表現でございますが、土曜、日曜にまたがって試合をしておりますので、土日の試合で計4試合という形になっております。

戻りまして、②番でございますが、県有施設利用料金の減額補助ということで1,200万円余、こちらにつきましてはチームが県有施設で公式戦を行う場合に利用料金を軽減しているものでございます。

3つ目といたしまして、ふくしまの夢・元気チャレンジ事業ということで1,200万円余でございますが、県民運動である健康寿命の延伸に向けた取り組みということで、老人クラブや高齢者の通いの場、復興公営住宅などを訪問して健康教室を開催するための費用でございます。この場にプロスポーツチームの選手が同行いたしまして、子供や親子、高齢者が楽しんでスポーツをできる事業を実施していくということでございます。

こちらにつきましては、右のほうに同様の事業成果を記載をしております。一番は、地域貢献活動を支援するということでの事業となっております。

それでは、下段に移りますけれども、福島市のほうでこういった取り組みをしているかという内容でございますけれども、スポーツホームタウンにぎわい創出事業として本年大きく4つの事業を展開しております。Jリーグ所属、ユナイテッドF Cのホームタウンである利点を生かしまして、プロスポーツを活用した観光プロモーション、それから町なかのにぎわい創出につながる事業を展開しております。

まず、1つ目でございますが、少年少女のサッカー交流大会、こちらにつきまして県内外からサッカーチームを招聘いたしまして、12歳以下のチームになりますが、交流大会を継続開催しております。宿泊につきましては、飯坂温泉をあっせんいたしまして、またモモなどの特産品などの提供を通じて観光のPRを展開するとともに、交流人口の拡大につなげているところでございます。

右側の事業成果でございますが、関東圏、横浜ですとか、栃木からも多くの方が来ていただいております。例年200名を超す参加者がございます。うち100名程度は、市内への宿泊を行っております。半数のチームは、市内からの参加になっておりますので、県外から、市外から来たチームというのは市内に宿泊をいただけるという状況になってございます。

続きまして、集まれ3,000人福島市チャレンジマッチ、ことしは10月末に予定をしておりますけれども、ホームゲームの開催に合わせて福島市の主催マッチを開いております。来場者の拡大を目指すとともに、町なかのにぎわい創出を図る内容となっております。本年度につきましては、ただ試合を行うだけではなくて、前日祭というものを駅前のほうで開催を予定しております。翌日の観戦に結びつくような仕掛けを考えたいと考えております。

続いて、3つ目でございますが、草サッカー交流大会（OYAJI CUP）というものを今年度初めて開催いたします。こちらにつきましても県内外の草サッカークラブ、主に30歳以上の男性を主体とした交流大会を開催する予定でございます。こちらの皆さんにつきましては、もちろん本人が選手である以上に少年少女の指導者であるという方もたくさんいらっしゃいますので、将来に向けまして、合宿につながったり、福島にこんな魅力があるということが伝わるような内容としていきたいと考えております。

こちらにつきましては、今年度初回の開催ということで、関東圏を含む参加者80人程度を予定をしております。今事業の組み立てを行っているところでございます。

最後に、4つ目といたしまして、サポーターをターゲットにしたガイドマップを作成いたします。こちらにつきましては、中心市街地の飲食店を中心に選手が町なかのご紹介をするような形を考えております。地域経済の活性化につながるパンフレットにしていきたいと考えております。こちらにつきましては以上でございます。

では、4ページ目をお願いいたします。Jリーグというものに関係する自治体として、連絡協議会を設けております。Jリーグのクラブのホームタウンであったり、ホームスタジアムを所管する自治体が連絡調整を行いまして、さまざまな意見交換を行っているところでございます。こちらについて

本年度の事務局は持ち回りで岡山県、会長は岡山県知事となっておりますが、参加団体につきましては73団体となっております。米印に書きましたが、Jクラブの中でも、例えば大阪を例にとりますと、大阪府と大阪市がガンバ大阪を支援しておりますが、スタジアムにつきましては吹田市に所在をしております。そういった関係から、1つのチームに幾つかの自治体が立地するケースもありますので、そういったところで73団体という数字になっております。

そういった自治体が例えばこういった取り組みを行っているか、支援というところで行っているかということでございますが、下段になります。2つほど例を書かせてもらいましたが、静岡市につきましては第二次の静岡市総合計画、スポーツ振興基本計画を上位計画と位置づけまして、そのプロジェクトの中にJ1の清水エスパルスがございます。取り組みとして、大型映像装置の設置あるいは住民観戦のバス代などをクラブと市が負担しているというような事例がございます。

それから、福岡市につきましては、スポーツは、人を育て地域を育て、社会を育てる力があり、その課題を解決できるソフトになれるとのコンセプトから、1番の資金援助の面、それから市営地下鉄の観戦用の専用車の設置、それから車両のラッピングなどを行っているという事例がございます。

では、次のページに行きまして、福島市のほうがどのような位置づけで事業を行っているかということでございますが、総合計画後期基本計画の実施計画の中に、第4節でございますが、交流・定住の促進、この中にスポーツの活用による交流人口の拡大というのがございます。その中でスポーツホームタウンにぎわい創出事業を実施しているところでございます。

あわせて、市の観光振興計画の中に民間企業との連携による情報発信と、抜粋でございますが、プロスポーツ団体と連携しまして、各企業等の運用するホームページやイベント等を活用した観光情報の発信ができる仕組みづくりを進めるということで、ここにつきましてはユナイテッドとも連携をしながらSNSや、あるいはアウエーの試合のほうでパンフレットを配ったりというような仕組みづくりを行っているところでございます。

それでは、これまでユナイテッドFCをどういった経緯で支援をしてきたのかということでございますが、下段でございます。支援の経過でございますが、これを表明いたしましたのが平成19年の1月になります。当時NPO法人福島夢集団並びに県都・福島にJリーグチームを作る会がございまして、Jリーグ準加盟制度に基づく認定申請にあたりまして、ホームタウンの自治体としての支援というのが必須でございましたので、市民等2万3,546人の署名を添えてこの要請を受けたのが平成18年の12月であります。それを受けまして、今後ホームタウンの自治体として支援することを意思表示したのは、記載の平成19年1月となっております。

当時の初期の支援内容の主なものでございますが、十六沼公園サッカー場、それから信夫ヶ丘競技場使用の減免措置等を平成20年から行っております。それから、ふくしまの水のペットボトルの贈呈や応援横断幕の寄贈を、それから市政だよりによる試合日程等の広報も行っていました。また、市役所サポーターズクラブを設立しまして、支援をしたり、あるいは事業によりましては交通安全ポ

スターへの選手起用や福島駅東口広場に応援看板などを設置し、機運醸成に努めていたところでございます。

記載はございませんが、震災をその後経験している中で、F C 福島ユナイテッドとなりましたのは2011年の2月でございました。その後すぐに震災があったということで、チームとしても大変苦しい時期がございましたが、選手の皆さんは避難所を慰問されたり、少年少女の体育教室なんかも開催されまして、支援にも当たっていただいたというところがございます。それから、業務提携を結んでいる湘南ベルマーレのほうと連携しまして、少年少女を湘南のほうに招待してキャンプなども実施いただいたところがございます。

続いて、6 ページをごらんいただきたいと思います。ユナイテッドのほうの来場者数の経緯をお示ししたいと思ったのですが、カテゴリーがちょっと違いますと人数が変わってきますので、本日はJ 3 に上がってからの過去のことを記載させていただきました。平成26年からの4 年分でございますが、一番真ん中の欄をごらんいただきたいと思います。当初、平成26年1,321人でございました。翌年が、若干落ちて、1,289人、平成28年については1,678人、昨年は1,485人という状況でございました。本年度、これまでですが、約1,500人を超える数字で推移をしております。

それでは、もう一枚の資料がございます。A 3 のほうをごらんいただきたいと思います。こちらは、各クラブのホーム試合での平均入場者数を示したものでございます。基本的に試合のほうはホームゲーム側が運営をしておりますので、J リーグのほうから来ている数字ということでご理解いただきたいと思うのですが、3 段目に福島のほうのご説明した推移がございます。他のクラブとの比較というところでわかりやすい数字を幾つかお示ししたいと思います。福島の1 つ下、栃木がございます。こちらにつきましては、一番右側のところですが、平均で5,000人ほどの来場者数があるという状況でございます。栃木につきましては、J 2 からの降格チームということで、2016年、2017年をJ 3 のほうで戦いました。もちろん地域性、それからプロスポーツを振興していくというところで、ほかにもバスケットボールであったり、野球であったり、自転車であったりというまちづくりをしている中で、老若男女問わず5,000人ぐらいの平均入場があるという現状がございます。

それから、その3 つ下、横浜でございますが、逆にこちらは981人程度の人数となっております。横浜につきましては、ご承知のようにJ 1 の横浜F・マリノス、三浦知良選手が所属するF C 横浜など3 チームございますけれども、やはりチームの人気度合いですとか、その年の規模によりまして、この入場者数は大きく差が出ているという状況がございます。

それから、一番下の3 チームほど、一番下段3 つですけれども、23という記載がございます。こちらにつきましては、各チームの育成チーム、23歳以下のチームがJ 3 のほうに参加をしておりますので、そういったチームが3 つあるということでご承知おきいただきたいと思います。こちら参考としてお示しさせていただきます。

それでは、この資料に戻りまして、6 ページ下段でございますが、現在クラブのほうがこういった

目的や存在意義としてチーム経営を行っているか、こちらはユナイテッドのほうから示されている資料でございますが、地域に愛され、必要とされるクラブというものを目指している内容でございます。クラブの活動そのものが経済効果につながるというところで、まずは風評の払拭というものでございますが、アウエーゲームにおいて県産品のPR販売なども行っているところでございます。それから、フットボールセンター構想というのは将来的なものです、決してハード面の整備ということではなくて、練習場に行けば芝でのサッカーを楽しめたり、高齢者がグラウンドゴルフを楽しめたりというのも可能だというふうな内容でございます。それから、スポーツエンターテインメントの提供ということについては、もちろんプロサッカーの観戦ができること、またフードパークで地物を楽しめるということ、それから親子でのスポーツ教室、ふれ合いなどの場も図ることという内容でございます。

それから、下の丸ぼちでございますが、福島フットボールレベルの向上へも寄与していくことが可能だということでございます。先ほどユナイテッドと共同で開催しております12歳以下のサッカー大会があるということをお示ししましたが、どうしても優勝に結びつくチームは県外のチームがほぼ優勝を占めている状況になってございます。まだまだ指導者の育成ですとか、選手の育成という部分でクラブとしてノウハウを提供できる場所はあるというふうに考えている次第でございます。

それから、右側でございますが、人材育成という面でも地域を支える人材の育成が可能だということでございます。1つは、チームを支える、運営を支えるスタッフの人材、それから選手としてもアカデミー12歳以下、15歳以下というチームを持っておりますので、サッカー選手を育てる人たちはございますが、現時点で18歳以下、ちょっと高校生のユースチームはまだございませんので、この創設というのは将来に向けて必須になっている状況でございます。こういったところも勘案しまして、あってよかったと思われるクラブを実現していくというのが現在の福島ユナイテッドとなっております。

続きまして、7ページに移りますが、Jリーグのチームはカテゴリーもふえてきている中で、経営規模の格差の広がりというのが現実になってございます。一番上にJ1で18クラブ、J2、J3と入れまして、今現在54チームがございまして、財政規模からいたしますとJ1平均大体33億円、J2ですと13億円、J3ですと3億円というふうになっております。参考で書かせていただきましたが、2015年の経営情報開示資料によりますと、浦和レッズが大体60億円ぐらい、大宮ですと30億円、J3の長野ですけれども、6億円というような内容になってございます。そのような中でユナイテッドFCにつきましては、大体3億円から3億5,000万円ぐらいで推移しているのが現状でございます。

続きまして、下段に移りますが、スポンサーやファンクラブの数というものを示させていただきました。クラブパートナーにつきましては、昨年100社を達成したというところでございますが、震災後、東北への支援という部分でスポンサーになっていただいたところが手を引いたり、あるいはスポンサー料の減額等を申し出る企業もふえているという現状がございますが、今のところ100社を維持してい

るという内容でございます。

それから、下段、クラブユナイテッドのほうのファンクラブでございますが、2015年当時3,800人いた方が現在3,400人ということになっておりますが、ファンクラブ数の増員ということだけではなくて、いかにスタジアムに足を運んでいただける方をふやすかというような事業に現在シフトしてきている状況もございます。

その点を含めまして、次ページ、8ページでございますが、ユナイテッドが行っている現在の活動の主なものを記載させていただきました。まず、1つ目でございますが、県産品や観光のPRを選手あるいはスタッフによって行っていております。特に選手におきましては、農産品の生育作業に直接参加をしていただいております。選手の人気ですとか、商品に人気というものを加味しまして、アウエーの試合で販売、これネット販売を行っているところで、ここにつきましてはユナイテッドの中でも収益増につながっているという内容でございます。それから、くだものの木のオーナー制度なんかも活用いたしまして、モモやリンゴを販売しておりますので、県内外への販売も継続しているということでございます。平成30年、今年度からは地域と連携いたしまして、新しく米の育成というのもし始めたところでございます。

右側に移りますが、例年夏の時期にはモモをイメージしたユニホームを着用いたしまして、風評払拭に一役買っている状況でございます。こちら県都の産品のほうの風評払拭というところでの連携が大きいのでございますが、先週新聞報道等でも記載がございましたが、8月にはタイのほうで親善試合も行うということでございます。選手には各所で観光のPRなども行っていく予定になっておりまして、本市のモモなども入ってPRする予定でございます。

続いて、下段に移ります。ふくしまの水を活用いただいているところでございます。ホームゲームの給水用に採用いただいたり、試合映像等で選手が飲む姿を情報発信していただいております。また、練習用にも給水用に活用いただいております。健康面にもよい影響があるということで市水道局からの支援を行っているところでございます。

それから、地域の伝統行事にも参画いただいております。福島わらじまつりや暁まいりに参画いただくほか、飯坂のお祭りなどにも参加いただいております。また情報発信という部分でも地域と一緒に例えば飯坂の電車であったり、果物であったりというところを発信いただくものでございます。

続きまして、右側に移りますが、ふくしまマルシェという取り組みを行っていただいております。これは、アウエーの試合におきまして県産品を販売いただいております。野菜や加工品、ジュースなどを販売いただいております。風評払拭、品質のPRに一役買っているところでございます。福島の魅力だけではなくて、味の部分でも発信をいただいているところでございまして、昨年ですが、日本財団の、済みません、こちらJリーグアワードと書かせてもらったのですが、ヒーローズアワードという名称でございました。訂正をお願いいたします。第1回の表彰でございましたが、福島ユナイテッドFCがこちらを、活動を評価され、受賞していただいたところでございます。

続いて、9ページ目に移ります。チームといたしまして、環境問題への取り組みも進めていただいているところでございます。ホームゲーム終了後に会場周辺のごみ拾いを実施をいたしまして、サポーターや選手、チーム関係者をご尽力いただいております、周辺のごみを拾うことによりまして、最終的に海に流れ着くごみを減少させるという活動でございます。こちらは、ほかのJクラブとも連携して取り組みを行っているところでございます。

それから、2つ目でございますが、COOL SHAREマッチということで、昨年より県のほうと連携いたしまして、これはエアコンをとめてみんなが集うことによって地球温暖化に好影響をもたらすという活動でございますが、このマッチも県と連携して開催しているところでございます。会場のほうには県や市の環境課のブースも設置して、環境問題の啓発を行っているところでございます。

続いて、逆に福島ユナイテッドF Cを地域が支援しているという実例をお示しいたします。まずは、温泉旅館が選手に朝食などを提供いただいているというところでございます。単身の選手を基本といたしまして、朝食、最近ですと昼食も地元の旅館が提供いただいているということで、選手の育成環境面ということが充実をしております。また、こういった連携がチームイメージの向上につながっていくということでございます。飯坂温泉とは連携を深めておりまして、トレーナーによりますウオーキングコースの設定なども行っているところでございます。こういったところから選手育成に大変定評をいただいております、選手の獲得ですとか、あるいはJ 1、J 2の契約に至らなかった選手がもう一度体を鍛え直して育成面で、またいろんなところで効果を得ているということでございます。

それから、健康面でのサポート体制の構築ということで、試合へのドクターの派遣だけではなくて、県立医大をはじめ専門学校などからも選手の健康面のケアを行っていただいているということでございます。こちらについては以上でございます。

では、最終ページをごらんください。参考として書かせていただきました。まず、Jリーグとしての地域支援の実例でございますが、1つは遊休地の活用などを促進しております。廃校の活用・再生と書かせてもらいましたが、水戸にあります水戸ホーリーホックというチームが昨年廃校となりました学校を改築いたしまして、クラブハウス、それから練習場の整備などを行っております。

それから、Jリーグとしてグラウンドの天然芝化というものを支援していただいております。参考でございますが、施設整備、全国の芝生化ということなのですが、ここは天然芝、人工芝を含めて約2,000面あるという内容でございます。J F Aに登録しているサッカー人口は、延べ人数で91万5,000人、サッカーチーム数は2万8,000人という昨年度末の数字でございます。

それから、スポーツ人口の増大に向けた取り組みを行っております、女子サッカーですとか、あるいは障害者がいるスポーツの普及、振興に寄与いただいております。

また、指導者、それから教員向けの講習なども行っているほか、子供たちにはトップアスリートとふれあう機会を提供し、ノウハウなどのフィードバックを行っております。一つの例といたしまして

は、歩くサッカーというものを普及しておりまして、これは走らない、接触しないというサッカーで
ございます。また、まぜこぜサッカーというものは、健常者、障害者が一緒になるようなサッカーを
取り入れているということでございます。

最後に、クラブの課題ということで載せていただきましたが、まずＪリーグライセンスというもの
がございまして、Ｊ３にとどまるための要件として問題になっておりますのは、スタジアムのほうの
ナイター整備、とうほう・みんなのスタジアムのほうなのですけれども、平成32年６月までに照明の
整備というものは一つのライセンスの条件となっております。それから、専用練習場の確保という
ところで、現在十六沼、それから信夫ヶ丘競技場を移動しまして、大体６割から７割程度の市内での
練習場になっておりますけれども、どうしても十六沼も土曜、日曜日と大会等があった場合に練習が
難しいときがございますので、米沢あるいは相馬周辺の練習場のほうに出向いて練習を行っている
ときがございます。こちらにつきましては、来年度天然芝２面のグラウンドが整備予定でございませ
うで、そういった状況も鑑みながら今後そういうふうに見守っていきたいと考えております。

しかしながら、クラブライセンス、３期連続赤字のクラブには発行されないという規定がございま
すので、例えばチームを強くするためには急激な補強とか、そういったものを行うと安定した運営が
またできませんので、そういったところは経営状況等を考えながら進めていく状況でございませ
う。

右側に移りますが、仮に現在Ｊ３で４位という順位でございませうけれども、優勝したといたしまし
てもＪ２の昇格要件を満たすという状況ではございませう。１つは、平均観客動員数が3,000人以上が
必要という要件がございませう。こちらにつきましては、2017年ベースですと1,485人という状況でござ
いませう。それから、とうほう・みんなのスタジアムにつきましては大体5,400席ございませうが、固定席
が1万席必要だという状況がございませう。それから、先ほどお示ししたユースチーム、18歳以下のチ
ームの創設というのでも継続的な選手の育成という部分であったり、というところでこちらでも必須とな
っております。以上から、知名度は向上しているという表現をさせていただきましたけれども、福島
ユナイテッドＦＣというチーム名を知らない人はなかなか少なくなってきたのかなと考えております
が、では選手のお名前と顔が一致する人がどれだけいるのか、あるいはフロントの皆さんの顔が、距
離感といいますか、そういったものはどれだけ近いのかというところは、私たちもこれから取り組ん
でいかなくてはいけないところだと考えております。そういったソフト事業にも重点を置きながら、
いかにスタジアムに足を運んでもらえるような事業を展開していけるのかということは年々考えなが
らやっていきたいと考えているところでございませう。

説明は以上でございませう。

（石原洋三郎委員長）ご質疑のある方はお述べください。

（後藤善次委員）ご説明ありがとうございました。５ページのスポーツホームタウンにぎわい創出事
業のこれまでの予算を教えてくださいませうか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）それでは、過去５年分の予算ベースでお示し

いたしますが、平成26年は予算1,000万円でした。平成27年につきましては1,500万円、平成28年について1,500万円、平成29年について1,500万円、平成30年につきましても1,500万円でございます。予算額は同額なのですが、この額の中で平成27年にはアウエーでの風評払拭のためのPRを始めたり、チームのパネル展を実施いたしまして、選手のご紹介ですとか、チームを紹介するような企画も始めたりいたしました。それから、平成29年につきましても予算の入れかえをいたしまして、サポーターズガイドというものを新規でつくりました。本年度につきましては、先ほどお示したように、OYAJI CUPという新しいものを開設する予算をこの中で取り組んでいるところでございます。

大きく取り組みの経過でございますが、チームの練習場の使用料の減免負担、それから12歳以下への少年サッカー大会の開催、それから福島市チャレンジマッチの実施、駅前看板設置などによります機運醸成というのが大きく4つの事業内容でございます。

（後藤善次委員）そうすると、直接クラブのほうにお金を出しているという項目は、例えば今ご説明のあった減免の項目、そういうものなのですか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）直接お金をユナイテッドFCに入れるというのは、基本的にはございません。市の主催試合をユナイテッドと市が連携して実施しているというのがおおむねの委託内容でございますので、基本的には事業を共同でやっているという内容が主なものでございます。

（後藤善次委員）確認ですけれども、このほかにはJリーグに対して、ユナイテッドFCと具体的にできていないのかわかりませんが、対して予算措置されている項目というのは特にないですか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）観光コンベンション推進室としてはございません。

（佐久間行夫委員）福島ユナイテッドFCさんと福島市との約束事というか、協定みたいなものというふうなことで結ばれているか、ホームタウン構想としては。お互いの約束事、福島市はこういうことをやるから、ユナイテッドFCさんはどういうことをやってもらえるのかというのはやっぱりあって。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）平成19年1月に表明をした後に実際のJリーグのほうの準加盟が平成20年度からでございます。このときに市の方針としましては株式の取得ですとか、役員の派遣は実施しないということで協定を結んでおります。ただし、Jリーグの規約の中にJリーグのクラブはホームタウンにおいて地域社会と一体となったクラブづくりを行うという規定がございますので、スポーツの普及、振興に努めるというところで、こういった地域活性化につながるような事業に取り組んできたというところであります。

それから、参考でございますけれども、先ほど湘南ベルマーレと業務提携を結んでいるというところ

ろで、経営のノウハウですとか、PRの手法というものはJ1、J2で活躍するチームのほうから情報を取得しながら運営はしているというところでございます。

（佐久間行夫委員）福島市が手を挙げて、うちがホームタウンでやるということだけれども、責任はどこにあるのかなと思って。つまりホームタウンとしての資格をというか、自分たちの責任はどこまで考えればいいのか。ホームタウンと各自治体が公に言えることには、どういうことをするとホームタウンになれるの。ホームタウンと言うだけ、それで請求すればいいということなの。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）少しお待ちください。

（佐久間行夫委員）何かあるのだよね。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）済みません。本市がつかしました状況を確認させていただいて、後ほどご説明させていただければと思います。

（佐久間行夫委員）それは、福島市も公金を使ってホームタウンということで、公にしながら、ホームタウンだから、市民はみんなで応援しましょうという裏づけになるような、それが何か微妙だなと思うの。はっきりしないから、予算も使いにくいなと。資本金も出資金もお借りしにくいとかという話なのだけれども、ほかの市町村でも同じなの。熊本なんか行ったときなんか結構、J2とかJ1なのだけれども、市町村がもっと支援しているようなことも聞くのだけれども、その辺が明確なのかなと思っているのですけれど。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）支援の仕方というのは、自治体によって本当にばらばらでございます。1つは、企業体というメインの親会社があるところはもちろん経営状態も万全でございますが、逆に言うと親会社のほうが企業経営が傾いたときにスポンサーが離れてチーム状態が危うくなると。最近ですと、長崎市がいい例だったと思うのですけれども。

（山岸 清委員）ジャパネットが買ったのでしょうか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）そうです。ジャパネットさんがスポンサーについてチーム経営も安定して、スタジアムの計画までできたというところまではちょっと今回書かなかったのですけれども、松本市、松本山雅というチームがございしますが、こちら逆に経営資本に2,000万円ぐらい入れたり、スタジアムの建設で数十億円支出したところに住民監査請求が起きたりということで、この辺対住民説明がきちんとできるかというところは重要になってくるかと思います。

（佐久間行夫委員）それは、どういうことでホームタウンということで位置づけをして、市民に対してどういうことだから、金を使うのだよということが明確になっていないと、そうになってしまうのかなと思った。だから、ホームタウンって何なのかなというところが明確に市民に知らせないと難しいところなのだと、ほかにそれで成功しているところもたくさんあるので、市民の皆さん一人一人にはホームタウンになるとこういうことでにぎわいもあったり、経済も回っていくのだよというのがわかるようにして、そういう成功事例もたくさんあるから、そういうことが福島市内は明確ではないというか、わかりにくいなというのと、福島県内に1つしかJリーグチームないのに予算規模はたっ

た3億円、ほかは3つも4つもあってもできるのだけれども、福島はほかに何かと競合しているから、これしかスポンサー的な予算経営規模が大きくなるしないの。何かその辺はあるのですか。それとも大きな例えば企業がないとかということになってしまうのか。やっぱり大きなスポンサーがいないというところが大きいのですか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）チームのフロントの方とお話しする機会の中では、本当に一生懸命動いていらっしゃるというのは、もう分刻みのスケジュールでスポンサーの方回りしているというのは聞いているのですけれども、委員おっしゃったように、大規模と言ったら失礼ですけれども、大きい企業がきちんと支えるという体制があるところがやはり強いと感じております。ただし、安定した経営という部分では、先ほど申したように100社のサポート企業があつて、小口のスポンサーも約300社ぐらい抱えているみたいなのですから、そういった地域の支えというのは積み重ねの中で今活躍しているということです、これがまたJ2、J1というふうにながっていったときにきちんとしたことを考えなければいけないと思います。現状J3の中で活躍している部分につきましては、安定した経営なのかなと個人的には考えております。

（佐久間行夫委員）やっぱりどこのサポーターもJ3ならJ2を狙いたいよね。そうしたら、J1になりたいよね。そういうふうになっているのだけれども、この経営規模というのは選手の年俸と比較してそういうふうな大きく差が出ているの。J1は60億円ということをいえばJ3は6億円、3億円だから、10分の1ぐらいの年収なの。年収で選手って買うものなの。そういうもので人って集めるものなの。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係主査）年収については今お話し、年俸についてのお話があったかと思うのですけれども、やはりJ1とかの有名な選手になりますと何億円という金額であります、ユナイテッドの場合は200万円から300万円くらいというお話はクラブ関係者のほうから聞いたことはございます。

（佐久間行夫委員）J3で。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係主査）福島ユナイテッドの選手で。やはり選手の年俸とクラブの経営規模といいますか、もちろんその金額、60億円とかというところであれば、それなりのスーパースターといいますか、上に出ているでしょうし、そういったところでも比例してくるのかなとは考えております。

（佐久間行夫委員）そういう話だと何か悲しくなってくるね。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係主査）そうですね。選手の年俸のほかにも、やはりJ1とかJ2のクラブになりますと自分で練習場を持っていたりですとか、クラブハウスを持っていたりという部分もございますので、そういったところに経費がかかっているというのもあるかとは思いますが。

（山岸 清委員）10ページのクラブライセンスで3期連続赤字のクラブにはライセンスは発行されな

いというけれども、ところで福島ユナイテッドF Cは大丈夫なの。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）一昨年にちょっと赤字に転落したときがございましたが、それ以外は黒字経営をしておりますので、現時点ではこの問題はないと考えております。

（山岸 清委員）結論みたいになってしまうのだけれども、やっぱりチームは強くなければだめなのだ。昨日やった広島かい、ずっと最下位だったのが今は巨人に3立てだ。しかも2回も。マツダスタジアムにおいては12連勝だ。昔と全然もう変わってしまっている。まだ聖光学院と福商をやっていたりした。とんでもない。20年も30年前は、聖光なんて福島にめためただったのだから。チームの福商マークを見ただけで負けていたのだから。ところが、今は逆。昔は、田村が監督をやっていたころなんていうのは、一生懸命田村監督が来たから入ってください、入ってくださいやっていたのだ。そのころは、福商にばかり行っていたのです。こうやって逆転してしまうのだ、スポーツの世界。本当におもしろいものだ。だからやっぱり強くなければだめなのだ。そして、このユナイテッドF Cができたころもサッカー好きな人が市民でいる。試合が福島であれば、そのときに観光客がいっぱい来るのだと言っていたの。ところが1,000人台だから。本当にやっぱり1試合に5,000人も1万人も集まれば、飯坂温泉の旅館がみんなスポンサーになる。だから、強くなって、あと決して優勝なんてすることないのだ。いや、おもしろい試合だと。ところが、いつ行ったら5対ゼロで負けるのなんて誰も見に行かない。昨日の聖光と福商、あればばんやられたら4回コールド、これ決勝戦だから、コールドないのだなと思って見ていたけれども、もう見る気しない。だから、昼寝になってよかったのだけれども。やっぱり強くなければだめだし、そういうふうに頑張ってもらえないのだ。そして、福島F Cが強くてどんどんほかのほうから来れば、本当に商工観光部は開店休業くらいだ。もう忙しくてしょうがないのだ。これ以上お客呼ぶななんて。冗談。

（斎藤正臣委員）私も10ページなのですけれども、アンダー18歳以下のユースチームというのはないって非常に残念なところで、中学生まで一生懸命やった子供が高校のときに市外のほうに、流出と言ったらあれですけれども、行ってしまえば可能性は、これは皆さんも、そのクラブチームの方たちも多分わかっていらっしゃることだと思うのですけれども、こういったところへの支援というものというのはできるものなのですか。可能性としてはどんなものですか。例えば何が足りなくてこれがないのかというのもわからないのですけれども、その辺ちょっと教えていただければ。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）今18歳以下のチームがないということで、まずはデメリットなのですけれども、せっかく15歳まで育った選手というのが近隣の仙台ですとか、山形とか、栃木のほうのチームに流出しているというのは、これは事実でございます。まずは、練習の時間帯がどうしても、ほかのチームもそうなのですけれども、学校が終わった後の夕方に練習を実施するということで、やはり専有練習場の確保というのは、ユナイテッドにとっては非常に重要な問題になっているということは聞いております。ただし、スポンサーの中にはこういった育成面に関してはスポンサーをしてもいいというチームが実際ございますので、今ユナイテッドのユニホームに入

っているスポンサーの中には、そういった育成面のほうに使うのであれば、さらにスポンサー費をふやしてもいいというチームも実はございますので、環境面が充実していけばこの辺は改善されたり、あるいは上を目指す体制をもっと築いていくという中で、ここは必須になってくるのかなとは思いますが。

（斎藤正臣委員）本市としては、できることといえば、やっぱり練習場の確保であったりとかということになりますか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）そうです。

（斎藤正臣委員）10ページの下段の左側の専用練習場の確保というところにもかかってこようかと思うのですが、このJ3の要件の専用練習場の確保というのは、これは1つの練習場で8割ぐらいそこで練習するような練習場が必要なのだということなのですか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）クラブによっては、もともと自分たちで練習場をつくり上げたチームもございますので、今後自分たちが使いたいときに使えるチームというのもございますけれども、ユナイテッドに関しましては、所管もかわりますけれども、スポーツ振興公社が指定管理になっております十六沼のほうを利用して練習をしておりますので、こちらは現在の使用率が大体6割から7割ぐらいで推移をしております。ほかのJリーグのチームが、環境がだんだん充実してきたことによって、この占有率の考え方というのも昔はもう少し多分低かったというふうにお聞きしておりますけれども、現在のJリーグライセンスの中では、決まったところでの練習というのが8割以上という規定になっておりますので、今のところJリーグからの勧告までは至っておりませんが、ここを上げていくというのは地元のホームタウン試合として必要なのかなということです。

（斎藤正臣委員）ちょっと所管がかわってしまうかもしれませんが、理想としては十六沼のこれからサッカー場整備されますけれども、あそこがユナイテッド福島さんで8割以上練習ができるようになれば、それはそれで理想だということなのですか。というか、そういった方向で今向かっているのですか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）天然芝の、私も詳しくないのですが、2つを養生しながら使っていくという中で、どこまでこの占有率を高められるかというのが保健体育課とも協議しながらいろいろ進めているということは聞いておりますので、将来的に多分一番土曜、日曜の大きな大会があるときというのが難しくなってくると思うのですが。

（斎藤正臣委員）そうですね。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）はい。それから、周辺の状況を鑑みますと、実は相馬にもかなり大きい天然芝のサッカー場があったり、米沢にも人工芝のグラウンドがあったりという中で、9月にはJヴィレッジが再開されるということで大きな大会も流出してしまうということもあると思うのですが、県内全域ということ考えたときには、この占有率もう少し上が

ってきたりするのかなというところ。それから、飯舘村にも全天候型の練習場が整備されるということで、もう少し広範囲の中で考えていく必要があるのかどうか。

(斎藤正臣委員) 最後なのですけれども、ただやっぱりホームタウンとしては十六沼であったりとか、市内の練習場で8割練習してもらって、ライセンスが剥奪されないようにされなければいけないのかなという思うところも。

最後、やはり自治体もクラブチーム、ユナイテッド福島さんとともに、J2昇格というものは見据えて今この取り組みというのもされている。目標の部分ですよね。最終的な目標ではないかもしれませんが、とりあえず核の部分でいうと、J2に上がって観客動員数を上げていくのだといううな、そういった方向性で取り組んでおられるということによろしかったでしょうか。

(観光コンベンション推進室観光プロモーション係長) ここにも書かせていただきましたが、スタジアムにいかに足を運んでもらうかというところはチームを支えたい、あるいはチームが気になるといいますか、スタジアムに行ってみたいと思っていただけるような仕掛けというのにも必要になってくると思いますので、そこにつながった結果、やはりスタジアムは必要なのではないかと考えていただけるような方向に持っていけるように私たちのほうでその事業を繰り返しながらPRをしていきたいと考えております。

(斎藤正臣委員) J2を目指して。

(観光コンベンション推進室観光プロモーション係長) そうです。

(菅田憲孝委員) ありがとうございます。5ページの下の支援経過のところ、いろいろ支援することを意思表示した、先ほど佐久間委員から協定の内容等々についてという質疑があったのですが、ここのプロスポーツチームの支援ですとか、連携することなんていうのは、これさっき事前に質問こういうのをするよということ saying していたとは思いますが、支援、連携するに至った経緯ですとか、理由なんていうのはもうちょっと詳細わかれば教えていただきたいと思ったのですが。

(観光コンベンション推進室観光プロモーション係長) 先ほど申しましたように、Jリーグの準加盟というものの申請にあたりまして、Jリーグの規約の21条なのですけれども、先ほど佐久間委員の質問のときもお話ししましたが、ホームタウンによって地域社会と一体となったクラブづくりという記載がございます。ここに当てはめるために自治体の支援というのは必要不可欠だったというところがございます。市といたしましてもスポーツの活用による交流人口の拡大というところに向けてサッカー、プロスポーツの活動が有効だという判断であったと当時は推測するのですけれども。

(菅田憲孝委員) ありがとうございます。そして、その後いろいろ取り組みを、いろんな事業をやっていたら成果も出てきているところなのですが、今後我々この地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域の活性化といった調査を進めていくにあたって、福島市としてのスポーツチーム、今ですとユナイテッドFCということになります、それを支援する意義というのは、今言った部分ともかかわってくると思うのですけれども、どのように認識しているか教えていただきたいのですが。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）私ども観光の部署にこのスポーツホームタウンにぎわい創出事業が移管されまして、一応3年目となります。観光になるということは、ユナイテッドF Cを一つの、コンテンツと言っているのかどうか分かりませんが、その知名度と応援できるJリーグチームが地元にあるということを、誇りになるのかあれですけども、そう思っただけのような事業を展開しながら、いかに福島に人を呼んで、いかに福島にお金を落としてもらえるかというところが一番重要なのかなと考えております。ユナイテッドF Cという名前は、Jリーグ3に加盟することによって、福島という名前もそうなのですけども、対外的には知名度は高いと考えております。ですので、アウエーのほうでPRする機会というのは非常に重要になっておりまして、ほかの部署ですと、農業振興課がミスピーチといってモモをプレゼンしたりというようなことも関東圏で十分行っておりますので、そういったところでいかに足を運んでもらうためのきっかけになるかというところでもう少し利用していく、逆に利活用していける余地があるのかなと考えているところでございます。ちょっとお答えになっているかどうかあれなのですけども、済みません。

（菅田憲孝委員）私からは、これ最後になりますけれども、本日の資料を含めてクラブの課題ですとか、クラブの取り組みというのは公表いただいた形になるのですが、クラブのほうの課題はよくわかったところなのですけども、一方で行政としてのチームを推す、あるいはスポーツホームタウン推進に向けた取り組みという観点での課題というのをもう少し明確に示していただけるとありがたいと思ったのですが。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）10ページ目にクラブの課題として書かせていただきましたが、やはりこのチームと市民の皆さんとの距離感というのをもうちょっと幅を埋められるような事業の展開が私たちも必要なのかなと考えております。その距離感を埋めることによりまして、職員もそうですけども、スタジアムにいかに足を運んでもらえるかというところを、支援を表明してからちょうど10年たちますけれども、少し視点を変えながら取り組んでいくべきなのかなと考えております。そういったところが予算の組み替えですとかにあらわれているのですけれども、一つ一つこういった方向性があるのかというところは議論をしながら取り組んでいきたいと考えております。

（山岸 清委員）俺余りサッカー好きでないのだ。ただ、今度のワールドカップあったから、毎晩放送が夜中でしょう。いや、参ったななんて思ったら、NHKでラジオもやっていたの。だから、今度ラジオ放送だと勝ったかどうか分からないうちにうつらうつらって眠れる。ラジオ放送もいいなと思って寝た。だから、福島F Cの試合、確かにスタジアムに行くのはいいのだけれども、試合最初テレビでもラジオでも見たことないなという人いっぱいいると思うの。テレビだと高いし、スポンサーつかないから、だめだけれども、FMポコあたりで、やっぱりラジオでちょこっと、ラジオも一生懸命盛り上げる気して、シュートなんていうときにはうんと大きい声出すのだ。そうすると、起きてしまうのだ。高校野球もテレビ朝日は準々決勝からやっていたの。NHKは準決勝と決勝。両方こっち

かけたり、こっちかけたりするの。やっぱりアナウンサーは、テレビ朝日のほうがうまいのだ。NHKは、間違っただけにいる。スリーアウトがツーアウトになっていたり、やっぱりこれ片方はスポンサーがあるから、インターバルのとき宣伝入るから。ラジオやテレビでやったら、今度スタジアムに行かなくなるかもしれないけれども、もともとF Cの試合見れない人らがいるから。だから、知名度は上がったけれども、やっぱり試合内容もうまくやってもらいたいのだ。FMポコあたりなら安くていいのではないかなと思う。あとは、今回ワールドカップなんか見ると、やっぱりレベルの、あの足の速い、ベルギーで日本も最後やられてしまった。あれ2点勝ったから、ああ、これいいあんばいだななんて思ったら、何だかうつらうつらしているうちに、たちまち負けてしまうのだ。だから、ああいうレベルの試合を見ると、今度普通の試合がおもしろくなるというか、でもプロ野球と高校野球だとそれぞれの野球のよさが違うから、そのよさを見習って試合をやったり市民に見てもらおうような工夫もこれからは必要なのではないかなと思います。特にあるかい。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長） ただいまご指摘いただきましたFMポコの生中継なのですが、実は年に、全試合ではないのですが、五、六試合やっていたかと思います。ただ、若手の市役所の女子職員に話を聞く機会があったのですが、やはり全くサッカーを知らない方がそういったラジオを聞きながらファンになっていったという経過もございますので、そういう放送をやっているということを私たちがもうちょっと推していかなければいけないのかなと今ちょっと感じたところでございます。それから、最近ですと御山のほうにNCVというケーブルテレビができて、たしかそこでそういったネット中継なんかもやっているかと思います。そういったところも含めてメディアにもうちょっと映るような、あるいは情報を取得できるようなところの告知を進めるべきなのかなというふうに考えておりました。

（後藤善次委員） 突き詰めていけば強くなるとか、選手を集めるとかというのは、これはJリーグの役割であって、その形がどういうふうに知名度が高まっていく、その知名度が高まっていくものをやはり私たちがうまく利用させていただいて皆さんにアピールをしていくということ。だから、行政側が選手の確保をするためにお金を出すとか、チームが強くなるためにグラウンドを準備するとかというところを、ほかの自治体はどこまでやっているのかわかりませんが、ラインというのはあるのではないかなと思うのです。チームは、自分たちの実力があって強くなっていく。強くなっていけば応援する方々がふえてきて知名度が高くなって、それをPRに使っていけると。PRにうまく行政が乗っかっていくという。そこは、やはり一つのラインがあるのかなというふうに思います。強くなってもらうために応援はしますし、さっきから言われているように、足を運んでいただく方をふやすというのがあるけれども、魅力的な試合を行っていくというのは、これはユニテッドの役目なのかなという。御嶽海がああいう試合をやったから、やっぱりファンが喜ぶわけであって、私たちは期待していなかったけれども、優勝してしまったという。ああいうことで見方が変わっていくと。もちろんサッカーで勝つということも必要だけれども、勝つ以外に魅力的な試合というのか、個性的なもの

いうのですか、見ていておもしろいという、負けた試合だったけれども、おもしろかったねという、それもやっぱりユナイテッドFCの活躍の仕方なのかなと思いますから、お金を使うことでなくて応援をしていく方法というのはもっともっと私たちが考えていかなければいけないのかなと今お話を聞かせていただいて感じました。

以上でございます。

（石原洋三郎委員長）回答はあれですか。ご質疑……。

（後藤善次委員）結構です。

（山岸 清委員）福島東も結構サッカー強くなったって聞いたこともあるのだけれども、地元選手が、始まったところだから、創生期だから、ほかから来てもらうのもいいけれども、地元選手に活躍してもらってどんどん、だからここにも書いてあるU18なんていうのも大事だし、夢をやっぱり地元で、そういう地元選手が活躍するなんていうとまだ、要するに地元選手が出れば福島のあれでも、親戚縁者も応援に行くようになってしまうわけでしょう。学校もあれだなんていう。うまく最初はこうやって、ある程度頑張れるまでは地元をやっぱり優先的に頑張らせたほうがいいのだ。本当は、ヨークベニマルとか東邦銀行あたりがスポンサーになってくれれば、ヨークベニマルもやっていたのだ。野球選手が一生懸命午前中大根切りして、午後から投げに行くのです。でも、やらなくなってしまった。

（山岸 清委員）うん。東邦銀行も何だか陸上競技はやっているけれども、あと、ソフトをやっている。ピンクパンサーだったね。あと、市役所にもフットベースクラブあったっけ。

（佐久間行夫委員）今もある。

（山岸 清委員）そこからちょっと行って、午前中市の仕事をやって、午後からボール蹴ったりして、いや、これ楽しくて、市の給料をもらって楽しんでいるのだろうと。そうしたら、そいつうまくなくなってしまって、何だかほかから1,000万円で引き抜き来たなんていったら、何だかね。冗談。

（佐々木優委員）10ページのところにもJリーグとしての地域支援の実例というところで、スポーツ人口の増大というのが載っていて、そもそも福島市のスポーツ人口ってどんな感じなのだろうなという疑問があって、多分もう既にどういうふうな感じであるということとちょっと問い合わせをもらったりしてお調べいただいているかなと思うのですけれども、わかる範囲で。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）スポーツ人口の推移というご質問かと思うのですが、一応所管のほうは教育委員会の保健体育課のほうで捉えている数字で、ご提示可能なものということで2つほどお預かりしております。1つは、市民体育祭にどのくらい参加しているかというところなのですが、過去2年分で平成28年度が38競技で1万1,499人、こちらが平成29年度は同じく38競技で1万1,065人という内容になっております。もう一つ、体育施設の利用実績というものを、延べ人数になりますけれども、平成28年度は140万人だったものが平成29年度143万人に伸びております。そういったところで、私どもの参考ということでちょっと引き抜いたものなのですが、十六沼のほうのサッカー場の利用者、これが平成28年度は16万6,000人だったものが平成29年は18万

2,000人に伸びております。こういったところで需要というのは高まっているのかなという思いはあるのですけれども、委員のご質問にきっちり答える数字だったのかどうかはあれなのですが、参考としてお示しいたします。

（佐々木優委員）ありがとうございます。それぞれ伸びてきているというところが傾向としてあるというふうなことなのかなというふうにも思います。福島市でプロスポーツチームって考えると、やっぱり福島FCしかないので、そこにもサッカー人口はこのぐらいいますよ、登録している人いますよとか、チーム数ありますよということなのですが、このサッカーの人口が福島市はなんていうことはわからないですよ。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）済みません。実は、県北のサッカー協会に登録している数字を問い合わせているのですけれども、現時点ちょっと回答がなかったものですから、後ほどわかりましたら書記を通じてご説明させていただきたいと思います。

（佐々木優委員）やっぱりプロスポーツを活用してどういうふうに活性化していくということが肝なのですけれども、さっきも福島にどうやって知名度を持ってもらって、来てどうやってお金を使ってもらおうかということを意義というふうにされているということだったので、福島の、8ページのところで、アウエーの試合において農産物の販売とか野菜や加工品、ジュースなど販売ということなのですから、どのぐらい売れているかという数字は持っていらっしゃいますか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）本日は、ここまでの数字は控えておりません。

（佐々木優委員）あちこちでそういう農産物の販売とかというのを今後やってもらうというのは大変いいことだと思うので、もちろん強くならないと知名度も高くないというのもあると思うのですが、それと並行してどういうふうに売っていくかというところもちゃんとやっていかないと本当に地域の活性化というふうには、スポーツが好きな人とそうではない人っていると思うので、そのバランスをいかに市民にわかってもらって、今こういうことも一緒に並行してやっているのですよということをアピールしていかないと、それこそ本当にサッカーにどれだけお金を使っているのだみたいな市民の指摘なんかも出てくるかなと思ったりするので、ほかに経済的にはこういう効果を持っていますというのをやっぱりどんどん、どんどんアピールしていかないといけないなということを、済みません、私の感想になってしまったけれども。

（渡辺敏彦委員）J3よりはJ2の方が良いのだけれども、活性化に関係あるか何だかわからないけれども、ユナイテッドさんって将来的に何年か後にはJ2に上がりたい、あるいは今度何十年か後にはJ1に上がりたい、そういった基本的な構想みたいなものを持っているのか、計画って。

（後藤善次委員）難しい質問。それはJ1でやりたい。

（渡辺敏彦委員）そこら社長に聞かないとわからないのだけれども、そこら辺は前向きにやっていかないと、結局いわきのほうが強くなってしまうと県大会で負けたりするでしょう。何だ、いわきのほうがやっぱり伸びてきてってしまうのではないかと不安を持ってしまうの。だから、今は負けて

いるかもしれないけれども、たまたま試合で負けても。だから、将来的にはＪ２に上がりたいよ。福島市は、これ質問であれなのだけれども、スタジアムをつくったりなんかというのは、そういうしっかりした計画の中で動いているの。ただチームがあるから、それを支援しましょうなんていう流れだけだったならば、将来不安だなという思いはあるの。その辺は、行政と市民一丸となってやって、それによって今度地域の活性化をどうしていくかというのも考えなくてはならないかなと思う。今やっているから、支援するけれども、向こうが強くなってきて、向こうがＪ２になってこっちが落ちてしまったら、それで終わり。ということでもしょうがないでしょう。そういうこともちょっと疑問に思ったのです。

あと、サッカーの話ばかりなのだけれども、例えば室屋さんについてもさまざまな支援をしていると思うのだ。見に行ったこともないのだけれども、実際この練習場のところでやっているのだ。どのぐらいの見学者というのかな、意外と今までよりは多分いろいろやっているから、興味を持っているんな人が動いていると思うのだ。そういった状況、実態というのはどういうふうに。一応プロスポーツみたいになっているから。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）室屋選手とのかかわりという部分につきましては、まずはスカイパークを所管する農政部のほうでイベントをやりますと、非常に多くの方が来ていただいているというのがまずございます。

それから、練習を見に来ているというところは、室屋選手がいつ練習をしているという公表をなかなかしていないと思いますので、行ったら練習をされていたり、飯坂に行きますと空中を飛んでいたというのを私見たりするのですけれども、実は来年度に向けまして、室屋選手が子供を対象とした航空ラボという新しい取り組みをしております、そういったものを活用しながら観光誘客につながるような取り組みを何か一緒にできればいいというのが現在のマネジメント会社のほうと水面下で調査を進めているところでございます。

ちょっとお答えになっていなかったら申しわけないのですけれど。

（石原洋三郎委員長）構想の件は、チームのほうで構想は持っているかどうか。

（渡辺敏彦委員）市のほうの所管が違うのかもしれないけれども、市のほうとしてはユナイテッドに対して、今若干の支援はしているのだけれども、Ｊ２になったら、Ｊ１になったらって将来を考えていくと、例えばスタジアムをつくるという話があるでしょう。Ｊ２に上がるにはスタジアムをつくらなくてはならないという話になって、一時盛り上がって、どこがつくるっていろいろ話しがあったりした。役所としては、前の市長のときから夢のような話を語っていたけれども、今もそういった話もちょこっと出ています。それが行政として長期計画の中でそういったことも含めて検討ぐらいしているのかい、何かしらは。これ全然また所管違うけれども、お聞きするのだけれども。

（商工観光部長）スタジアムの関係につきましては、公共施設の再編整備の委員会をつくって今そこでもんでいる最中で、年末には青写真を示すというふうなことを申し上げておまして、今現在４回

中2回までその委員会を開催したところでございます。その後3回、4回と重ねまして、年末までに
どういうふうな方向性になるのか、公共施設、スタジアムも含めてその青写真を示すというのが現段
階での進捗状況でございます。

それから、市として今後J2に向けて云々というふうなお話、市の計画でというふうなお話かと思
うのですけれども、まず商工観光部としてこのユナイテッドFCを所管しておりますのは、あくまで
も観光資源としての活用ということが第1点に来ております。先ほど来もお話し申し上げましておる
ように、観光資源として活用して、交流人口の拡大を図って、その上で地域の活性化をしたいという
のが一番の目的でありまして、かつそのような行政組織規則上の事務分掌にもなっております。した
がいまして、我々はそういうふうな観点からどういうふうになれば交流人口が拡大していくか、そう
いうふうに考えていきますと、先ほど来お話ありましたように、観客がふえるのが一番大切だなとか、
強くなるのが大切だなとか、その辺のことは全く同じであります。あくまでもスタートとしての考
え方は観光資源として活用して交流人口を拡大していきたいというのが我々のポジションですので、
そういった観点からチームの強化とか、そういったところも考えていくようになろうかなというふう
に思っております。

（渡辺敏彦委員）総合的に考えれば、例えばどこどこで試合やりますよ、車ない人はバスで行くと、
電車で行くという話になる。交通というような部分での政策的な部分というのかな、そういったのも
全部変わってくるの。だから、新たにスタジアムをつくるのに、どういうふうに回遊させるかという
部分とかあると思う。町なかをこういうふうに活性化したいみたいながあると思うのです。その辺
も今後に向けては検討しなくてはならないのかな。例えばあづまでやったらバス余り走っていないの
ではどうしようもない。シャトルバスみたいの出しているのかな。それも含めて。あと、要望として
言いたいのは、サッカーの応援に行ったことないのだけれども、役所の職員2,000人もいるのだから、
3分の1ぐらい試合見に来てもらって。

（山岸 清委員）そんなこと言うと、市役所職員になる人いなくなってしまう。野球ならいいけれど
も、サッカーではだめだ。

（渡辺敏彦委員）例えば小学生、中学生を土日だったらただで入れてしまえば、数だけは確保できる。
そういったことやってやっているのかな。

（後藤善次委員）子供たちはやっているよね。

（渡辺敏彦委員）300人ぐらいただで入れてしまえば。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）まず、先ほど会場との交通機関ということで
ありましたが、毎回バスとシャトルバスは走っております。

それから、市の職員のファンクラブの方が二百数十名おりますので、一応庁内の掲示板を活用しま
して、情報の発信は継続的にやっているところでございます。

それから、小学生とか中学生の誘致ということなのですから、ユナイテッドも福島市に限らず、

県北のエリアの自治体とも連携をしながら、伊達市マッチデーとか、国見、桑折町マッチデーという形で小中学生を招待するような取り組みも行っておりますので、もちろんサッカーをやっているお子さんたち、教室の見学会を実施しておりますけれども、新たな子供たちも、ファンの方々あるいは親子で来てもらえるような仕掛けというのは継続して実施しているのかなと考えております。

（黒沢 仁委員）地域社会と一体となったチームづくりというようなことで、まさしく地域社会イコール市民の皆さんがどれだけこのプロサッカーを通してのユナイテッドを認知して応援していくかという部分に視点を置くことによって市が果たす役割というか、今いわゆる観光資源だというような部長の答えがあったのですが、経済効果ばかりでなくて、そこにいろんな先ほどからお話がある少年とか少女とかいった若い世代をいかに取り込みながら、チームと市民と、あと市役所の果たす役割という三位一体の相乗効果をいかに高めていくか。ソフト部分の話は随分出ていますが、他自治体とのいろんなそういった事例なんかも参考にしながら、1,500万円で精いっぱい今活動も展開しているというようなお話も聞いたのですけれども、そこはある程度上乘せをしながら、あるいはソフト部分を利用しながら、あるいはあと民間活用といった、さっき銀行とか、いろんな事業主を巻き込みながら、そこに支援を持っていく。そして、そこにまた新たな経済効果を生み出すといったそういうふうな1つではない、いわゆる3つぐらいこういうふうな流れを行政がつくることによって、何とかスポーツの活性化と経済効果の波及につなげていくような支援策といった部分をやっぱり市が中心になってここは検討していかななくてはならないのかなという部分での今回所管調査だと私は認識しているのです。そういった部分において議会も行政もその辺は協力しながら、どうしたらこのプロスポーツチームが福島の活性化につながっていくかという部分を真剣になって、東京オリンピック・パラリンピックもあることですから、そういった部分も視野に入れながら、将来を見越したスポーツタウン構想といった部分をやっぱり改めて構築していく必要があるのかなんていう思いを抱かせていただいたというようなことで感想のみです。

（石原洋三郎委員長）感想。

（黒沢 仁委員）はい、答えは要りません。

（石原洋三郎委員）根本的なところでお聞きしたいのですけれども、ユナイテッドのほう、今までのちょっと順番の経過を教えてもらえればありがたいのですが。リーグの中での順位。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）J3に上がってからということでお示しさせていただきますが、平成26年が7位です。平成27年が7位、平成28年が14位、昨年が10位、現在は4位となっております。

（石原洋三郎委員）あと、ユナイテッドのほうで会津若松市もホームタウンになっているということなのですが、例えば福島市と会津若松市とで何か連携していることってあるのでしょうか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係長）会津若松市がスタジアムを毎年1試合ホームスタジアムとして提供していただいている関係で、昨年から使用料の減免等も含めてホームタウンと

なったのが会津若松市なのですけれども、一応行政間のほうで連絡をとりながら、例えば福島のあるほうでの試合の際に会津のほうからキャラクターが来たり、観光ブースを出したりということで、相互に観光PRの場というのは持ったりはしています。

それから、先日開催された会津のほうのスタジアムの試合には、市役所サポーターズクラブとして人を募って試合観戦に訪れたりという交流は進めておりますので、今後に向けては行政的な部分での事業展開というのがこれからなるとは思いますけれども、取り組みを伸ばしていきたいと考えております。

(石原洋三郎委員) あと、平塚の話がさっきあったのですけれども、これは多分チーム同士の交流なのかなと思うのですが、わかる範囲で平塚とのもし交流の中身がわかれば教えてもらいたいと思うのですが。

(観光コンベンション推進室観光プロモーション係長) まず、平塚の湘南ベルマーレと業務提携をしているというのが1つでございますけれども、まず選手のチーム間のということでよろしいでしょうか。

(石原洋三郎委員) そうです。

(観光コンベンション推進室観光プロモーション係長) まず、チームスタッフというところでは役員等どうしてもJリーグの中で、こういった方が必要という人材の確保が難しければライセンスはおりませんので、そういった人材確保の面でベルマーレのほうから人材を招聘したいという形がございます。

それから、モモのPRのほかということで、毎年湘南で開催されます試合のほうにミスピーチが向いていって、来場者にモモをプレゼントしてPRをしたりとかということは継続して実施をしています。

また、ユナイテッドのほうの試合を1試合湘南で開催しまして、関東圏のほうのファンの獲得とか、あるいは選手もベルマーレのほうからこちらに来ている方がいらっしゃいますので、そういった方を対象にファンを拡大しているというふうな狙いで試合等も行っているという状況がございます。

(石原洋三郎委員) そうすると、例えば市のほうで何か平塚と連携しているということもあるということなのですか。

(観光コンベンション推進室観光プロモーション係長) 観光の部分ではちょっとないのですけれども、やはり目的の合ったプロモーションが実施できるということであれば、今現在は農政部門を中心に行っているということでございます。

(石原洋三郎委員) 最後に、ユースチームというのは基本的にないということよろしいのですか。ユナイテッドのユースチームはなくて、今後つくらなくてはいけない、要はJ2を本気で目指したいのだったらつくらなくてはいけないということよろしいのでしょうか。

(観光コンベンション推進室観光プロモーション係長) 今現在15歳以下のチームがございますので、

アンダー15、アンダー12ということでそれぞれ存在しております。今度18歳以下16歳というちょうど高校生と同じ年齢帯のチームがございませんので、ここについてちょっと将来的にJ 2ライセンスにひっかかってくるというところがございます。

（山岸 清委員）チケット代は幾らでしたか。1試合1,000円かい。いろいろかい。福島市主催でいいよ。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係主査）入場料、チケット料金なのですけども、当日券の場合ですが、まず席がSゾーンとAゾーンございまして、Sゾーンの場合は大人が2,500円、小中高校生が1,000円、それ未満であれば無料です。Aゾーンにつきましては、大人が2,000円、小中高校生が800円、それ未満は無料というような形で当日券の価格となっております。

（山岸 清委員）試合時間は、1時間半くらいだったか。

（観光コンベンション推進室観光プロモーション係主査）試合時間は90分になっておりまして、前半45分、後半45分の90分となっております。

（山岸 清委員）高校野球よりは高い。高校野球は500円だから。

（石原洋三郎委員長）ほかございますでしょうか。時間も押してまいりましたので。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（石原洋三郎委員長）それでは、時間も押しておりますので、特になければ質疑を終結いたします。

以上で当局説明を終了いたします。ありがとうございました。

当局の皆様方におかれましては、本当にお忙しいところありがとうございました。今後もさまざまな部分でご享受いただく機会があるかと存じますので、その際はまたどうぞよろしくお願いいたします。

ここで当局退席のため、暫時休憩いたします。

午後2時36分 休 憩

午後2時40分 再 開

（石原洋三郎委員長）それでは、委員会を再開いたします。

それでは、本日の当局説明の意見開陳を行いたいと思います。

午後3時からオリパラの特別委員会もあるということなので、特にオリパラの委員の方から本日聴取した項目に関してご意見いただければありがたいと思います。

（渡辺敏彦委員）スポーツ関係のこだわりになってしまって、非常に難しいなと思いながらやっていたので、正副委員長のほうでこの辺整理整頓できるような、これからいろいろ調査するのだから、やっていかないと何か活性化でない方向に走りそうな心配してしまいました。これが俺の感想です。

（石原洋三郎委員長）活性化ではなくて……。

（渡辺敏彦委員）サッカーチームの話とかになってしまうのだ、文教だなみたいな。その辺今後調査していくのだから、それが本当にわかりやすくやってもらわなければ、俺何か整理つかないような気がするのだ。

（石原洋三郎委員長）文教福祉と所管の範囲も明確にしながらという……。

（渡辺敏彦委員）だから、いろいろ言ってしまうえば、それは今度事務局のほうで整理整頓して活性化の部分抜き出していかないと変な答えにならないかな……。

（黒沢 仁委員）今渡辺さん確かに心配する部分は、我々も当初これもらったときにうんと心配した。だから、先ほど部長が答弁したとおり、このチームを観光資源という捉え方しかしていないと。そうすると、何だい、追求するのは経済効果だけかいというような部分になると、何となくこれ我々が取り組むあれとすれば何かうんとちょっと寂しいのかなという思いがあったからこそ皆さんそれぞれの意見を出して、そこは経済民生という所管にとらわれることなくある程度議論を深めながら相乗効果を高めていくということにまでいったって俺はいいのかなという思いはある。

あとは、このプロスポーツチームとの連携とあるけれども、俺なんか若隆景とか、そういうような個人プロのあれなんかもやっぱり視野に入れながら、経済効果あるいは観光資源につなげていくという部分もいいのかなという思いをいたしました。意見開陳です。

（石原洋三郎委員長）観光資源というところだけではなくて、ほかの面もこうしながらという、多面的にいく……。

（黒沢 仁委員）多面的にやって俺は問題ないのかなと思うのだけれども。

（佐久間行夫委員）先ほど利用する人も観光資源として育てなくてはいけないでしょう。そのためには、やっぱり強くなくてはいけないよね。みんなでおもしろいというふうにはやらなくてはいけないでしょう。強くするためにはどうするか。どんどん、どんどん考えていくと、やっぱり強くするための監督をどうやって招聘するのだろうかということも必要だし、あと福島大学にはスポーツ科学的な先生もいるから、さらにそういう面から福大との連携をどうしていくかやってほしいとか、いろんなこと出てくると思うの。確かに観光資源というのは、それは育てないと観光資源にならないのだから、だから余りこだわって、ではそれは文教だからなんていったら、もう手の出しようがない。できたものをどうするかではなくて、育てていくことも経済民生としては必要ではないのかなというふうに思うのです。

（黒沢 仁委員）異議なし。

（斎藤正臣委員）私も本当に同じ意見なのですけれども、本当に観客動員数が1,500人前後で推移したって何の経済効果もない。何のと言ったらあれですけれども、たかだか知れていると思うのです。J2に昇格して、みんなが強いユナイテッド福島を応援するという機運を高めなければいけないのですけれども、そのためには練習場が必要だったりとか、文教の部分もやっぱり入ってくる。でも、これを議論しなかったら何にもならないと私も思っておりますので、ちょっと広く今回は話をしてもいい

のかなというふうに感じました。

以上です。

（山岸 清委員）サッカーは野球と比べて何でこんな全世界に広がっているのかと、今回つくづく考えた。野球は、それこそ道具から、スパイクから、ボールから何から金かかる。かかるのだ、小さい子供やるのに。サッカーはボール1個だ。だから、最貧国でもスパイクなんかやらないようなはだしで蹴っていたり、それこそ小さい子供やっているのだ。あれは小さいときそういう何にもないところでやって、そしてサッカースクールに入っていくと言ったのだ。だから、そんなグラウンドなんて、本当にサッカーなんかそういう道具も何にもないところからやっていた人らの底辺人口が多いのだ。そうして考えてみたら、トレードマネーなんて野球選手の何十倍だ、一流選手は。だから、最後スポーツに勝つにはやっぱり根性なのだ。負けん気魂。だから、貧しくてここから上がっていくってありがたい。日本の相撲取りを、これ相撲大好きな人に言うけれども、日本の相撲が弱くなったのは洋式トイレにあると俺は思う。

（黒沢 仁委員）股関節ね。

（山岸 清委員）うん、和式でなくて座って。だから、もう弱くなったの。腰だから、高安とか稀勢の里とか。だから、見てみな。

（黒沢 仁委員）腰だからね。

（後藤善次委員）きょうお話をしていただいたのは、観光コンベンション推進室という角度だったではないですか。だから、どうしても今あるものを使っていかにPRするかというところから出発していますよね。今皆さんから出てきた内容は、異口同音にやはり経済を活性化するためにはプロスポーツの人たちに期待をするためにこちら側からもどんどん、どんどん支援していこうと。そういう角度に今回の調査がなっていくのであれば、所管も、商工観光部から逸脱できるかどうかわかりませんが、うちの経済民生の所管の中で観光コンベンション以外の方たちの、今予算措置していないところですね、プロスポーツチーム、もっと絞ればユナイテッドFCを強固なものにするための支援をしていく角度の話というのは聞けないものですか。

（石原洋三郎委員長）そういう関係している市当局。

（山岸 清委員）結局競技場の話になるのだ。

（黒沢 仁委員）本当にJ2目指すのかどうか。

（後藤善次委員）要するに有名になっていただくために1つは強くなるとか、個性的になるとか、そのラインのところの応援が必要だと今ご意見になったわけですよね。そうなってくると、観光コンベンションの域ではなくなってくる。

（石原洋三郎委員長）ただ、市当局で該当するとなると教育委員会とか。

（後藤善次委員）いや、ここから出てしまうと、それは私らの所管ではなくなってしまうから。でないと今の観光コンベンションはもう今あるものを使ってやっていく、あるいは観客動員をどうしてい

くかみたいレベルでしょうから、だから今皆さんから出たもっともっと強くなってもらって、PR効果もあるチームになってもらいたいということになってくると。

（石原洋三郎委員長）一応今度ユナイテッドチーム自身には経営者とか、そういった方にお話は聞かなくてはななんて思っていたのですけれども、当事者というのですか。市のほうは、一回正副で一度考えてみてというところでしょうか。

（山岸 清委員）そのユナイテッドのほうからの一応注文、要望、希望、願望を聞くだけ聞いたら。

（菅田憲孝委員）とにかくさまざまな地域活性化の効果があるというのは、市も認識は強いのだろうと思いつつも市民への認知度とか定着がやっぱりまだまだ少ない。チーム名は知っているけれども、選手の顔は知らないということが出ていて、うまく活用していきたい市としてはまだどこまで市が介入できるか、どのぐらいかかわっていくかって温度差、距離というのも余りわかっていないのかなという気がしました。きょう私意義というのもちょっと聞いてみたのですが、まだ明確な部分というのも余り見えてこなかった部分があるので、今後その支援のすべき中身、そしてその意義という部分も整理しながら今後進めていけばいいのかなというふうに思ったところです。

以上です。

（佐久間行夫委員）感想でいいですか。

（石原洋三郎委員長）はい。

（佐久間行夫委員）先ほど年俸の話をお伺いしたときに二、三百万円なのだ。生活しながらこっちに単身でいるでしょう。そうすると、少くく御飯を食べさせてもらっても自分で働きながらみずからやらなくてはいけないということは、そんなに強くなれないのかなと思って。専門的にやっている方は、J1、J2だとその10倍の年俸だったら専属にトレーナーをつけながらできるし、それだとそれに見合った監督もやってくるのは、やっぱり経済力がないとだめなのだなという感じしました。ただ、人が入るには先ほど地元の人がいないよね。東高校の話だよ。あと昔から強いところ、尚子学園とかいっぱいあるけれども、それはアンダー18の関係が福島県内にちゃんとそういうチームができていないから、つながっていかないのかな。この前聖光学院で地元、須田優真というのだけ、4番。俺らの西信中学校の後輩で……。

（山岸 清委員）あれホームランを打ったのでない。

（佐久間行夫委員）ホームランも打った。ただ、東海大相模にはちょっとレベルが違うなと思ったけれども、やっぱり地元の人がいるとみんなで応援するよね。俺のほうからもバスで行く人が、何台でもみんな行くの。地元だからとなるけれども、だからそういう意味では地元のメンバーが1人でもいいと思う。そういう意味ではアンダー18とかつくりながら選手強化がなくて日本中に散らばっていく全体的な人の流れ、スポーツアスリートの福島市内の育て方にもあるのかなというふうに思う。その辺は押さえどころではないかなと感じました。感想です。

（山岸 清委員）今のうち、弱いうちだから、それきくの。聖光学院がこれだけになると、全国か

らそっちだめなやつ聖光に行こうと来るのだから。だから、レベル全然違うやつらが集まってくるのだ。

（黒沢 仁委員）あと、これはいつも全国の市町村対抗、駅伝あるでしょう。白河から県庁前ゴールで。そうすると、県内でも福島市は弱いのだ、いわきだの、会津若松だの、郡山だの。市の部門だって3番から4番、4番から5番といっってはだめなの。何でも1番になってやろうというような、いわゆる根底からのそういった子供の育成からスタートしてやっていくことがやっぱりうんと今求められているわけだから、そうすると地元でそういうような選手がいると応援したくなるのだ。若隆景だってそうだ。あと、須田君だってそうだ。そうすると、バス1台ちゃんと俺のほうの地元で貸し切るからね、こうなるわけだから。そうすると、だんだんその相乗効果も生まれてくるのだ。それにしむけていかなければだめだ。聖光学院だってあっちの西のほうだの、あっちのほうから来た人らばかりで、何だ、地元の福島代表といったって、ほかのやつらばかりだとなってしまうの。だから、俺は聖光応援しないで福商を応援しているのだ。

（佐々木優委員）確かにこの商工観光部の所管の中で話そうとすると、なかなかある状況で何とかしなくてはいけないというところにとどまってしまうなというのは皆さんの話と一緒にだなというふうに思うのですが、ただまだ福島市としてお金をかけずにやれることとか、やり方ってもしかするとほかにも何かいい方法がきっとあるのだと思うのです。それをほかの自治体の視察の中で手本にできるようなこと、お金をかけずにやれることとか、そういうこと考えていかなくてはいけないなというふうに感じました。

（石原洋三郎委員長）あと、一応私もやっぱり会津若松とか平塚とか、そういうところとうまく連携しながらとかしていったほうがいいのではないかなと思ったり、あとどなたかが言っていたマスメディアの有効活用というところですか、そういったのも重要ななんて思った次第であります。

ほか何かございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（石原洋三郎委員長）続いて、そのほかについてを議題といたします。

本日いただいた意見は、次回にまとめを行いたいと思います。

ここで、次回以降の委員会の日程の確認をしたいと思います。次回以降の委員会日程については、8月7日火曜日午後1時からとなっております。次が8月29日か30日の2日間で確保していただいていたかと思うのですが、一応29日水曜日午後1時30分からということで、この日はユナイテッドさんの参考人を……。

（黒沢 仁委員）何時からですか。

（石原洋三郎委員長）29日水曜日の午後1時30分です。あと、ご参考になのですけれども、書記のほうから新聞記事をご参考に配付させていただければと思います。

【資料配付】

（石原洋三郎委員長）そのほか皆様から何かございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（石原洋三郎委員長）なければ、次回８月７日火曜日午後１時からということでよろしくお願ひしたいと思います。

以上で経済民生常任委員会を終了いたします。

午後２時59分

散 会

経済民生常任委員長 石原 洋三郎